

さんこう昔話文庫

第1話 蛇塚

中津市三口の大井手井堰から南1キロメートル、山国川の右岸寄りに、水位の変化によって、かなり広く川底の隆起が見られる。「明治30年代までは岸と陸続きで、一面に草が生い茂り、草刈りにいった」という。永い年月の間、洪水のたびに岸は削り取られ、島になってしまった。その島も次第に洗われて水中に没した。

ここは鶴市神社ゆかりの地でもある。「鶴市宮御縁起」によると、お鶴・市太郎の悲話について、「湯屋弾性の発言を以って、袴を水に投げ入れ、その先に沈める袴の持主を人柱に定むべきこととし、7人共に水口より遙か南に小島崎という所に行きて

立ち、各々袴を脱ぎて水に入れれば、しばらく浮きて流れけるが、不思議や湯屋弾性打粥の袴こそは、水底に沈みける伝々」とある。この小島崎がこの島である。蛇塚ともいう。



この岸にはお宮があった。今でも下宮という。30年ぐらい前まで御神木が残っていたが、落雷のために幹が引き裂かれ、その一部は川に朽ち落ちた。ここには多くの蛇が生息していた。

こんな話がある。佐知に住む釣り好きの人が、ここで魚を釣っていたが、横の方でガサガサと音がする。ヒョッと見ると、御神木の枝から胴回りが30センチメートルもあるかと思われる蛇が向って来ている。びっくりして、そのまま釣道具も何も捨てて家に帰り、寝ころんで高熱にうなされた。その後は三度の飯よりも好きだった魚釣りをやめてしまった、という。